

Planning and Coordination

MACHINE TIME EXECUTION

REPORT (2005-4-3 CYCLE)

Experimental Group	E559	Reporter	三輪 浩司
Scheduled Period and Shift	12/13-12/28 41shifts	Main, Sub, Para	Main

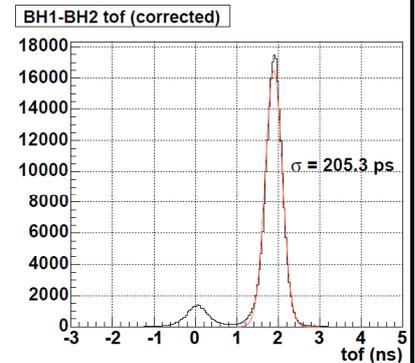
Experimenters 今井憲一、齊藤直人、舟橋春彦、藤村寿子、三輪浩司、大樂誠司、関義親、上垣内暁、千阪克行、永江知文、澤田真也、高橋俊行、関本美知子、垣口豊、野海博之、里嘉典、高橋仁、豊田晃久、丸田朋史、藤岡宏之、中嶋大輔、高橋智則、成木恵、田村裕和、小池武志、三浦勇介、木下沙理、白鳥昴太郎、馬越、仲澤和馬、渡辺崇臣、亀山智弘、味村周平、福田共和、谷田聖、石元茂、鈴木祥二、J. Arvieux、K. Hicks、R. Zavislak、

SUMMARY OF EXECUTION AND RESULTS

12/13-14 スペクトロメーターの検出器のtuningおよび、トリガーの調節。さらにK+ビームの調整も前回のパラメーターを用いることによりCMマグネットのスキャンにより調整を終える。

12/15-26 (K+,pi+)のデータ収集を開始。この間3シフトほど(pi+,K+)のデータやbeam throughなどのキャリブレーションのデータも収集した。

12/26-28 液体水素標的を空にしてバックグラウンドのstudyのために(K+,pi+)のデータをempty targetで収集した。実験は概して順調に行われた。今回の実験ではDCセパレーターが安定して200kVで動作していたのでビーム中のK/pi ratioは前回の実験に比べよくなっている。前回の実験で照射したK+の約7割程度を今回の実験で照射した。スペクトロメーターの分解能については(pi+,K+)反応を用いてΣ+を調べることによって見積もっており、FWHMで約2MeV程度であり、前回の実験と同程度の分解能が得られている。



Beam TOFによるPID

EXECUTED MACHINE TIME, BEAM CONDITION, DOWN TIME etc.

- 陽子強度はほぼ予想通りの強度であった(1.0x10¹² on K6 target)。
- DCセパレーターは安定して200kVで動作した。
- 加速器のトラブルによるビームタイムのロスは合わせて1シフト程度であった。

COMMENTS